

先週の講壇から

“ わたしも関係者？ ”

ヨハネによる福音書 第13章 第1節～11節

聖句「イエスは、『もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる』と答えられた。」(13:8)

1. 《裏切りのユダ》 私の後輩に牧師の息子がいます。受難節が巡り来る度に「ユダの野郎め！」「こいつさえいなければ、イエスさまは十字架に掛けられずに済んだのに」と思っていたそうです。聖書にはイスカリオテ以外のユダも大勢います。ですから、ユダヤ教徒の間では、悪い名前ではありません、でも、キリスト教信仰の伝統を継ぐ欧米では、「ユダ」という名前は「裏切り者の代名詞」のように受け止められて、自分の子に「ユダ」と名付ける親はいません。
2. 《ルサンチマン》 後輩は、ユダの悲惨な末路を読んで溜飲が下がる思いだったと言います。福音書では「首を吊って死んだ」ですが、「使徒言行録」では「地面にまっさかさまに落ちて、体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました」とスプラッター描写です。これこそは「ルサンチマン」です。「怨念、怨嗟」と訳されますが、無理に道徳や倫理が押し付けられた時に、押し付けられた弱者が抱く憎しみです。特定の価値観を一方向的に押し付けられた律法主義者が、他人を裁いたり監視します。「姦通の女」を捕らえて、鬨り殺しにしようとした人たちも同じ。正義の心からではありません。正義に名を借りた鬱憤晴らしなのです。
3. 《ユダの足さえ》 1938年、ドイツ国内で突撃隊がユダヤ系の商店を破壊略奪し、シナゴークを焼き打ちし、ユダヤ系の市民が暴行を受けました。世に言う「水晶の夜」事件です。ドイツの親たちは「ユダヤ人がキリストを殺したからだ」と子どもに苦しい説明をしたそうです。今も世界中で同様の事件が続いています。コロナ禍の時には、東洋人というだけで殴られる事件がありました。「ヨハネによる福音書」は、ユダの裏切りの原因を「サタンが入った」とします。以前は「非現実」と思いましたが、最近は腑に落ちるようになり成りました。私たちの中にも、いつでもサタンは入って来るのです。けれども、それを承知の上で、イエスさまは私たちの足を洗って下さったのです。イスカリオテのユダの足さえも。

朝日研一朗牧師